

第 154 号

Björk

ービョルク(白樺)ー



ダーラ豚
この豚は私がコーペラスは源、1945年に地方の貯蓄銀行より依頼
されて「豚の貯金箱」が制作の始まり。現在のモデルは空想ではないが
既にあると案のインスピレーションとしてスウェーデンでも愛されている。
(Nils Olsson Dalahästar)

2月5日(土)よりSCFセンターホール一階で開催している「SCF ダラヘストコレクション展」では、スウェーデンを代表する工芸品であり、お土産としても親しまれているダーラヘスト(ダーラナホース、ダーラナ地方の馬の意)を各種展示しています。中にはこのような馬ではないものも展示していますが、地域ごとの歴史を物語るデザインのダーラヘストも展示しています。

日本で活躍しているスウェーデンの企業紹介「デラル株式会社」 2

寄稿「ぜひとも聴いて欲しい!今が旬のスウェーデンクラシック音楽」(後編) 北欧音楽研究家 朝倉 崇 6

寄稿「コロナ禍のオンラインイベントや子育てから考えたジェンダー観のアップデート」
..... URL (ユニバーサルリサーチラボ) 代表 浦野 真理 / 北欧日本人学生会代表 中村 満里奈 11

(『連載寄稿「スウェーデンの現在』、『広報誌「ビョルク」これまでのあゆみ』はお休みします)

一般財団法人スウェーデン交流センター(理事長 内野 貢)

〒061-3777 北海道石狩郡当別町スウェーデンヒルズ2329-25

TEL 0133-26-2360 FAX 0133-26-2992

http://www.swedishcenter.or.jp/ e-mail: info@swedishcenter.or.jp



日本にあるスウェーデンの企業はどういったものがあるか、みなさんにご存知ですか？

ボルボや IKEA、H&M、Spotify などをご存知かと思いますが、実際にご利用されている方も多いと思いますが、日本国内に事務所や支店をもつスウェーデンの企業はそれ以外にも数多くあり、日本の経済や日本人の生活に大きく寄与している企業も少なくありません。

今回はその中で酪農関連機器の製造・販売で日本の酪農に深く関わり、SDGs (=Sustainable Development Goals “持続可能な開発目標”) など時代に沿った形で新たな酪農の在り方を日本の酪農家に提案しているスウェーデンの企業「デラバル (DeLaval)」について、日本法人の代表取締役社長である中野省吾氏へのインタビューも交えてご紹介します。



創業者デ・ラバル

デラバルの歴史は古く、1845 年ダーラナ県オーシャ Orsa 生まれのスウェーデン人技術者グスタフ・デ・ラバル Gustaf de Laval によって 1883 年に創業された AB Separator という会社に端を発しています。



創業者 グスタフ・デ・ラバル

グスタフは今日デラバルが扱っている搾乳機器や、世界初となる乳とクリームを分離する分離機をはじめとする遠心分離機、蒸気タービンなど、今日の生活に欠かせない多くの機械の開発に力を尽くしました。彼はスウェーデンにおいて 92 の特許を取得し、37 もの会社を設立するなど、生涯にわたって精力的に活動をした人物ですが、彼の発明は今もなお人々の中で使われており、現在のロケットエンジンのノズルに使われている技術「ラバル・ノズル (ドラバル・ノズルとも言われています)」は、グスタフが蒸気タービンを使うために開発したものが基になっています。

テトララバル・グループ

グスタフが興した AB Separator はその後 1963 年にアルファ・ラバル Alfa Laval AB と社名を変え、1991 年には牛乳パックなどで有名なスウェーデンの企業テトラパック Tetra Pak がアルファ・ラバルの親会社となりました。その後 2000 年にスウェーデンの投資会社がアルファ・ラバルを買収し、アルファ・ラバルは熱交換器や流体移送機器、遠心分離機の開発製造・販売をする企業となりました。一方でテトラパックは搾乳機器をはじめとする酪農機器など一部を残し、それが今日のデラバルになっています。

現在のデラバルは、テトラパックと、ペットボトルなど液体充填のパッケージングを扱うシデル Sidel とともに構成されるテトララバル・グループ Tetra Laval の一角を担っており、スウェーデンだけでなくヨーロッパ各国、南北アメリカ、アジア太平洋地域、アフリカに至るまで、世界各地の酪農に大きな役割を果たしています。

デラバルは現在世界 100 ヶ国以上で展開しており、従業員規模は 4,600 人強。世界を「クラスター」という 3 つのエリアに分けて事業を展開しています。日本はロシア・中国・韓国・オセアニア・インド・東南アジアとともに「アジア・パシフィック クラスター」に属しています。



デラバルの日本法人の本社は日本で最も酪農が盛んな地域である北海道、その中心地札幌にあります。

日本でのこれまで取り組みやこれからの展望について、日本法人代表の中野省吾氏にお話を伺いました。

インタビュー：中野省吾氏

(デラバル株式会社 代表取締役社長)

日本でのデラバルのあゆみと 扱っていらっしゃる製品のことなど、 お取り組みについてお聞かせください

日本におけるデラバルのビジネスには 70 年弱の歴史がありまして、デラバルの製品が日本で取り扱われ始めたのは、1956 年のことになります。当時は長瀬産業という、今も関西に拠点を置いている企業が総代理店としてデラバルから製品を輸入していました。その長瀬産業とデラバルが、ジョイントベンチャーという形でビジネス化して誕生した会社が弊社の前身にあたります。その後 2003 年にデラバルが 100% 株式を取得し、晴れてデラバルの日本法人としてスタートいたしました。

主な事業内容としては、酪農関連機器…搾乳機器や生乳を保管するタンク、給餌機、糞尿処理の機械など、多岐にわたる製品を扱っています。その一部は代理店を通して販売していますが、ほとんどは弊社社員が直接酪農家の皆さんに販売しています。また、メンテナンスなどのアフターサービスや機械のパーツなど消耗品の交換、牧場を運営していく上で欠かせない洗剤や消毒剤、牛に与えるサプリメントなども販売しています。

弊社は日本各地で事業を展開しております。北は天塩や浜頓別、南は鹿児島まで、北海道に 10 営業所、道外には 16 の営業所、それ以外に千歳に物流拠点としての倉庫をもっています。以前は東京に本社を置いておりましたが、北海道は日本の生乳生産の半分以上を占めており、酪農業の中心地でもあることから、2020 年に本社を札幌へ移転しました。酪農業に関連する製品を扱う企業は日本国内に数多くありますが、外資系企業で、なおかつ製造から販売まで一貫しておこなっている企業というのは、弊社が唯一なのではないかと思っています。



昨年 12 月にヘーグベリ大使が来道された際に、デラバル社製搾乳ロボットを導入されている北海道江別市の株式会社 Kalm 角山様を視察されたときの様子。

弊社は酪農家の規模やニーズに合わせて様々な種類の機器を取り扱っています。その中でも、先進的な技術を結集させた主力製品が搾乳ロボット「VMS™ V300」です。



このロボットは、実際に生乳を搾る作業だけでなく、乳頭の洗浄・消毒、濃厚飼料（牛にとって「おかず」のような餌）の給餌、ゲートの開け閉めなど、すべてを全自動で行います。驚くことに、牛は 24 時間好きなタイミングで、自発的にロボットの元へとやってきます。

従来の搾乳方法は、腰をかがめたり、重い搾乳器（クラスター）を持ち上げたりと、作業員の身体に負担のかかる作業が多いものでした。搾乳ロボットを用いることで身体への負担を減らすことができ、「より効率的に牛を管理する」という、まさに現代的な視点に変わりつつあります。また、このロボットは、色々な機能において牛ごとに合わせた細かい設定ができるようになっており、酪農家だけでなく、牛の健康や居心地の良さを考えた設計になっています。



自動搾乳ロボット「VMS™ V300」

日本の酪農業界は高齢化が進んでおり、それに伴う後継者不足も深刻な問題となっています。「VMS™ V300」は、搾乳時に必要な手順をロボットが代わりにこなすため、牧場の人員削減にもつながります。また、日本政府も補助金を交付して酪農業の省力化と生産性の向上を支援するようになったので、搾乳ロボットを導入する牧場はここ数年で一気に増えました。

搾乳ロボットの導入については、北海道と本州では背景が若干異なります。北海道では、牧場の大規模化を目的に搾乳ロボットを一気に何台も導入されるケースが多いのですが、本州は土地の拡大は難しいため、省力化を目的に導入されるケースが多くなります。その場合であっても、他の搾乳機器と比べても搾乳ロボットはコンパクトなため、限られたスペース内で省力化を実現できるという点で大きな意味を持つと考えています。

昨年 12 月にヘーグベリ大使が北海道にお見えになった

際に、江別市内にある、弊社のお客様である二つの牧場を見学していただきました。一つは牛が自由に歩き回ることのできる「フリーストール」の牛舎で、弊社の搾乳ロボットを8台使用している大規模な牧場です。こちらは5つの牧場が集まって設立された共同法人で、企業としての側面ももっています。もう一方は、牛を牛舎内につないで飼育している、家族経営の小さな牧場です。ヘーグベリ大使は、「非常に対照的な牧場で興味深い」と関心を寄せて牧場を見学されていました。

ヨーロッパ圏では搾乳ロボットはかなり普及しております。牛を繋いで飼育することが禁止されているということもあり、家族経営の、比較的小さな牧場でも搾乳ロボットが導入されています。それとは対照的に、アメリカや中国では大規模な牧場が多く、日本と比べると面積は10倍、飼育頭数も1万頭以上飼育している酪農家も少なくありません（日本では1,000頭でも大きい規模に入ります）。これらの国は労働力も豊富なため、搾乳ロボットではなく、「ロータリーパーラー」というシステムを用いることが多いです。



ロータリーパーラー搾乳機「PR-3100HD」。ストール数 32 頭～100 頭まで、飼育数の規模に応じたサイズを用意しています。

このシステムは、牛がロータリーに入ると、足元の台が動き、ロータリーを一周する間に搾乳作業が完了する、という仕組みです。一度に最大 100 頭と、大頭数の搾乳作業をおこなうことができるため、飼育頭数の多い大規模牧場に適しています。もちろん、日本でもロータリーパーラーを導入している牧場はあります。搾乳ロボットだけでなく、お客様のご要望に合わせて様々な選択肢をご提案できることが弊社の強みでもあります。

弊社の使命は、酪農家のみなさんに機械を販売して、その悩みを解決していくことだけではなく、大学や地域の団体と連携して次世代の酪農家の育成に関わるなど、地域に貢献していくこともできると考えています。昨年12月にヘーグベリ大使がお越しになった際には、酪農学園大学の学生さんたちと交流をする機会を設けることができました。また、昨年末には、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、牛乳が5,000t廃棄されてしまうおそれがあるという報道がされました。その際には社内でも消費に貢献しようということで、牛乳・乳製品の消費を奨励する活動をおこなったり、弊社と縁の深い農協からバターを購入し、全従業員に配布したりもしました。こういった活動は今後も続けていきたいと考えています。

スウェーデンの企業ならではの お取り組みなどはありませんか？

デラバルは世界各地に事業を展開しているため、世界中から従業員が集まっておこなわれる会議がありますし、スウェーデン・ストックホルム郊外のツンバ Tumba という所にあるデラバル本社で研修を受ける機会があります。新型コロナウイルスの影響によりオンラインの開催に切り替わっていますが、外資系企業ならではのユニークな取り組みだと思っています。また、本社にある自社牧場「ハムラファーム」は、一般の方が見学することもできます。ここでは実際に牛を飼育しており、最新の機器を用いて自動で搾乳をおこなう牛舎と、伝統的な方法で搾乳をおこなっている牛舎がそれぞれあり、次世代の技術開発に生かしています。さらに、創業者グスタフ・デ・ラバルが1879年に開発したミルクセパレーター（牛乳とクリームを分離する機械）などを展示した博物館もあり、非常に充実した内容となっています。本社オフィスや製品を製造している工場も近くにあることから、酪農関係者のみなさんにとって面白い場所ではないかと思えます。



デラバルの自社牧場「ハムラファーム」

昨今 SDGs といった、持続可能な取り組みに関して、興味をもっている方が多いですが、デラバルではどのような取り組みをされていますか？

スウェーデンはサステナビリティ（Sustainability＝“持続可能性”）に対して非常に先進的であり、私たちも一企業として見習わなければならない面が多いと感じています。環境面ではもちろん、食品・動物に関わる分野の業種として、食品の安全性やアニマルウェルフェア（Animal Welfare＝“動物福祉”）に配慮した取り組みと、社会や経済への貢献の形を常に考えて取り組んでいくことが大切だと思っています。

SDGs については、特に3つのエリア「環境負荷への責任」、「食糧生産とアニマルウェルフェア」、「社会的責任と経済への貢献」でサステナビリティを強化していく考えです。

まず、「環境負荷への責任」については、リサイクルはもちろんエネルギー効率化や水資源の節約など、いくつかの点にフォーカスして取り組んでいます。次に「食糧生産とアニマルウェルフェア」については、酪農家の皆様は私たちの製品を使って日々生乳を生産していますから、その安全性を確保するために、搾乳設備の衛生管理を徹底する必要があります。また、アニマルウェルフェアにもつながりますが、牛の健康維持や疾病予防をサポートする製品の提案をおこなっています。そして「社会的責任と経済への貢献」については、※ダイバーシティ&インクルージョンといった、多様性を受け容れる文化を社内に浸透させようと、力を入れて取り組んでいます。また、当然ながらお客様の生産性を上げて、利益率を向上させていくことにも力を入れています。

デラバルの今後の展望について お聞かせください。

デラバルは、「持続可能な食糧生産を実現する」をミッションとして掲げています。このミッションを実現する

※ダイバーシティ&インクルージョン … 性別、年齢、障がい、国籍などの外面の属性や、ライフスタイル、職歴、価値観などの内面の属性にかかわらず、それぞれの個を尊重し、認め合い、良いところを活かすこと

ためには、酪農家の皆さんができるだけ長く、安定して仕事を続けることができる環境が大前提です。先に述べたような高齢化の進行や、身体への負担だけでなく、現在は新型コロナウイルスの流行に端を発する燃料・餌代の高騰といった問題が酪農業界を直撃しています。そういった課題や負担を少しでも改善・解消できるよう、製品や日々のサービスを通じて貢献することが、私たちの使命です。

私たちはメーカー企業ではありますが、「販売」することがゴールではありません。搾乳機器は買い替えまでに約10年と、長い期間を要するため、販売した後のお客様とのお付き合いこそが重要な意味をもちます。10年後のその先も弊社製品を使用したいと思っていただけるような、高い品質のアフターサービスを提供していくことが今後の目標です。

最後に、先に述べたように、企業活動を通じて地域に貢献していきたいと考えています。大学や関係機関との連携を通して、後進の人材育成にかかわったり、スウェーデン関連機関と若い世代との交流を支援したり…様々な方法が考えられると思います。これまで以上に関連団体・企業と連携し、地域貢献に力を入れたいと考えています。



自動搾乳ロボット「VMS™ V300」

デラバルの製品を扱っている農場を PC・スマホから見てみませんか？

VR 牧場見学ツアー



スマートフォンやタブレットのカメラを使って、左のQRコードを読み取ってください。

<https://vrtoursjp.delaval.com/>



発見力
つながりをみつける力

【業務内容】
美術、書道作品集・記念誌・町史・チラシ・ハガキ・
パンフレット・自費出版・インターネット事業・
各種イベント 他



NAKANISHI PRINTING CO., LTD.

中西印刷株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL (011) 781-7501 FAX (011) 781-7516
<http://www.nakanishi-printing.co.jp/>

前号 153 号では、昨年生誕 150 年を迎えたスウェーデンを代表する作曲家ヴィルヘルム・ステーンハンマルについて北欧音楽研究家の朝倉崇さんにご紹介していただきました。今回はその後編として、同じくスウェーデンを代表する作曲家として、今年生誕 150 年を迎えたアルヴェーンや、彼ら以外に代表的な作曲家についてご寄稿いただきました。

寄稿

ぜひとも聴いて欲しい！ 今が旬のスウェーデン クラシック音楽（後編）

北欧音楽研究家
朝倉 崇



アルヴェーンについて

ヒューゴ・アルヴェーンは 1872 年にストックホルムで生まれました。ストックホルム王立音楽院でヴァイオリンを学び、個人的に作曲家ユーハン・リンデグレンに作曲を師事していました。卒業後はスウェーデン王立歌劇場のヴァイオリニストとして務めるかわら、改めて音楽院で作曲を学びました。その後はベルギーに留学し、ヴァイオリンの研鑽を続け、作曲に専念するようになりました。1890 年から 3 年間は奨学金で海外を転々としていました。アルヴェーンは几帳面な性格だったらしく、ほとんどの作品について細かい記録が残されているようです。

スウェーデンに帰国後、スウェーデン王立音楽院から作曲家の教授として招聘されました。この大役は引き受けることはなかったものの、1910 年にウプサラ大学からの招聘を受けて音楽監督に就任し、1939 年まで約 30 年もの長きにわたってその地位を務めました。また名門男声合唱団のオルファイ・ドレンガルの指揮者を 37 年間も務めています。

その後、ダーラナ地方のレクサンド郊外に移り住み作曲に専念しています（この住み家は現在ミュージアムとして公開されています）。晩年を過ごしたダーラナ地方はスウェーデン伝統音楽の宝庫で、アルヴェーンはもともと自分の作品にスウェーデンの伝統音楽を積極的に取り入れる作風で知られていますが、ダーラナ地方を中心に生活するようになり、晩年期にはよりスウェーデン色の濃厚な作品が多く作られています。このようにアルヴェーンは作品にスウェーデンの伝統音楽やそのエッセンスを取り入れたこともあり、スウェーデン国内では最も愛される作曲家として知られています。

アルヴェーンの商品について

アルヴェーンはヴァイオリニストとしてオーケストラにいたため、主要な作品はオーケストラ作品の割合が大きくなっています。また、ウプサラでの合唱団との関わりが長かったこともあり、合唱がメインとなるカンター

タ作品も数多く残されています。スウェーデン語は音楽的な言語であるとも言われており、歌曲との相性が良く、アルヴェーンは歌曲作品も数多く作曲しています。

今回は私自身がオーケストラ活動を中心に活動していることも踏まえて、オーケストラ作品をメインに絞ってご紹介させていただこうと思います。

アルヴェーンの商品が初めてという方にはまず、3 曲あるスウェーデン狂詩曲をお勧めします。特にスウェーデン狂詩曲第 1 番「真夏の徹夜祭」はアルヴェーン作品の中で、世界で最も知名度が高く、広く演奏されている曲です。それに比べるとあとの 2 曲は演奏頻度としてはかなり少ないこともあり、多少マニアックな部類になるものの、わかりやすく魅力的な作品であるので気楽に聴いてみて欲しいと思います。各々の作品について少し踏み込んでご紹介しましょう。

スウェーデン狂詩曲第 1 番「真夏の徹夜祭」

（1901 年作曲、1904 年初演）

この曲は、まさにアルヴェーンの商品代表作と言ってもよいでしょう。スウェーデンの人々が待ち焦がれる夏至祭の様子を描いた楽曲です。夏至の頃は北極圏のように白夜まではならずとも、一晩中薄明かりの状態が続くので、夜通しフォークダンスと演奏がおこなわれるような夏至祭のイベントがスウェーデンのあちこちで行われています。冒頭に出てくるクラリネットの旋律が、NHKの「きょうの料理」という番組のテーマ曲と似ているということでピンと来る方もいるかもしれませんね。また、オーケストラ以外に吹奏楽やアンサンブル編曲もあるようなので、どこかで聞いている可能性はあるかもしれません。

夏至祭をご存知の方は、演奏が始まると早速夏至祭の様子が目に浮かぶかと思います。出だしのクラリネットの旋律がいろいろな楽器で次々に奏でられ、盛り上がった後、乱闘騒ぎがおこり、その場を逃れた若い男女がうっすら暗いなかで甘く語り合うようなシーンと場面が移り変わっていきます。ここで出てくるイングリッシュホルンやホルンのソロ、ハーブの神秘的な響き、チェロのピッチカート、木管や弦の奏でる霧のようなサウンドなどが絶妙なシーンを演出しています。まるで夏至の夜の薄暗いスウェーデンの森と湖の情景が目の前に浮かんで

くるようです。実際にこの部分をオーケストラで演奏してみると、アルヴェーンが音楽の風景画家としての類い希な才能を持っていることに驚かされます。そして明るい光が差し込んで来た瞬間を描いたように、調性が明るくなり、軽快な2拍子のダンスが始まります。ここを最初に奏でる弦楽器セクションがなんとイキイキとした新鮮な音楽を奏で、その後木管楽器が加わり、さらにオーケストラ全体に広がり、エネルギーを蓄えるようなりタルダンドを経て、3拍子のポルスカのフィナーレ部分につながっていきます。そしてヴァイオリンが陽気で躍動的な主題を奏で、木管が加わり、ホルンが対旋律を奏で、きらびやかなオーケストレーションで全体が締めくくられます。私も何度かこの曲を指揮しましたが、特に中盤の男女の甘い語らいの部分のイングリッシュホルンソロからエンディングに到る部分が実に見事なまでに精緻に書かれているので、何度演奏しても、また演奏がしたいという気持ちになります。本当にクセになるので、何度も聞きたくなること間違いありません。

スウェーデン狂詩曲第2番 「ウプサラ・ラブソディ」 (1907年作曲・初演)

この曲は植物学者のカール・フォン・リンネ生誕200年を記念して、ウプサラ大学からの依頼で書かれたものです。学生歌からの引用が多く、まるでブラームスの大学祝典序曲のような経緯をもつ曲です。

出だしはホルン4重奏でのコラール風に始まり、厳かな雰囲気をととも美しいオーケストレーションで醸し出しています。その後軽快な行進曲が始まりますが、不意にまるでヴェルディのアイダ大行進曲に似たフレーズも登場したり、シューベルトのグレート交響曲の影響を受けたかのようなパッセージが流れたりしながら、少しコミカルでユニークな行進曲がどンドン華やかに盛り上がっていきます。そしてオペラの場合場面転換のように音楽が移り変わっていき、フーガ的な込み入った部分を経て、さらにアルヴェーンの後半生の作品でよく出てくるような近代的で色彩的な調性変化を伴った不思議な感じのするシーンへと繋がっていきます。その後クライマックスを迎えますが、行進曲のメロディーが華々しく再現され、祝祭的な響きいっぱい曲が締めくくられます。場面転換がいろいろあって、また極めて華やかで優雅で明るい曲なので、なじみやすい楽曲です。

ここで少々ウプサラという街の紹介をしたいと思います。ウプサラは歴史ある大聖堂や、北欧最古の大学であるウプサラ大学を擁する気品の高い歴史的文化都市です。普段は落ち着いた文化都市ですが、毎年4月30日のヴァルボリの日にはあちこちから大勢の人々（ウプサラ大学のOBやOGも多いようです）が訪れて、街の中心部はスウェーデンとは思えないくらいの人口密度になります。私が参加した年には、15時を待つカウントダウンがあり、15時になるとウプサラ大学図書館のバルコニーに教授達が大勢現われてセレモニーがおこなわれ、大同窓会のよ

うな雰囲気でした。また市街の運河では、発泡スチロールで作った筏でレースをするイベントがあり、多くの仮装した出場者が競い合っていました。さらに夜には郊外のガムラ・ウプサラに場所を移し、スウェーデン国内最大の焚き火が行われます。これはスウェーデン最大のヴァルボリとして知られています。私は以前から取材したくて、このヴァルボリの日を挟んで数日滞在したのですが、ウプサラを愛する人々の熱気を感じる貴重な滞在となりました。アルヴェーンもこの街が好きだったからこそ、人生の大半をこの地で過ごしたのでしょう。

スウェーデン狂詩曲第3番 「ダーラナ・ラブソディ」 (1932年作曲・初演)

この曲はダーラナ地方の伝統音楽や音楽的素材をたくさん取り込んだ、晩年期の傑作の1つです。25分くらいの演奏時間となるので、ラブソディとしては特に長大な作品ですが、冒頭部と終結部の角笛で奏でているような主題の部分が長めであること、全体的にゆっくりした部分が比較的多いということがその要因に挙げられるでしょう。冒頭部と終結部の角笛のような主題の部分は、ダーラナの美しく遠くまで広がる自然を描いており、冒頭部のあとは、人々の踊りの場面の音楽が奏でられ、またダーラナの自然の情景を描いていきます。人々の快活なダンスの場面が再び現れた後、哀愁あるメロディーが熱く奏でられていきます。そこへ、突如として悪魔の踊りであるかのような強烈なポルスカが始まります。音楽的にもかなり攻めていて、演奏技術的にも非常に難曲となっています。アルヴェーンのオーケストレーションの円熟ぶりがもの凄く、譜面も細かいので、まるで後期ロマン派の大作作曲家リヒャルト・シュトラウスの譜面を見ているような気分にもなります。アルヴェーン版「山の魔王の宮殿」（ノルウェーの作曲家グリーグの「ペールギュント」の一曲です）とも言えるかもしれません。余談ですが、レトヴィークにある伝統音楽の家（Folksmusikenshus）に行った折に、特別企画展としてたまたま行われていた映像展示作品の中にこの曲のポルスカが使用されていて、その職員（楽器職人であり今は友人になっているが）との楽曲談義で大盛り上がりしたことが懐かしく思い出されます。

ここまで3つの違ったカラーのスウェーデン狂詩曲を紹介してきました。どれも名作だと思うので是非じっくり味わって欲しいと思います。

交響曲第2番ニ長調作品11 (1897-8年作曲、1899年初演)

アルヴェーンは交響曲を5曲残していますが、なじみやすいのは2番と3番ではないかと思います。

50分ほどの大曲である第2交響曲はベルギーに留学していた時期の夏休みに、ストックホルムの群島で第3楽章まで書き上げられたものです。第1楽章はとてもロマンティックな作品でシンコペーションのリズムが特徴的

です。調性のせいもありますが、ブラームスの第2交響曲、ドボルザークの第6交響曲、シベリウスの第2交響曲のような田園的、牧歌的な交響曲とも相通ずるようにも感じます。第2楽章は憂いのある重厚なゆっくりした楽章、後半部のフーガ的な部分はベートーベンの英雄交響曲の葬送行進曲を想起させる、なんとも濃厚に歌い込む音楽が続きます。第3楽章は荒々しく力強いスケルツォ、蕩々と大河のように流れる中間部も印象的です。終楽章は2つの部分に分かれていて、前半プレリュードの部分では物思いに耽ったような悩ましげな旋律が時に厳かに、時に熱く奏でられ、後半部のフーガに向かって変遷を遂げていきます。後半部のフーガは主題が複雑に絡み合い、良く練られた音楽で、オーケストラ全体がこれほど壮大なフーガを奏でる作品は他にはなかなかないのでは無さろうかと思うほど、極めて高い完成度の楽曲となっています。

実はこの交響曲は、第1楽章から第3楽章までと終楽章とはかなり毛色が違います。それは、アルヴェーンは留学のための奨学金の期間延長を申し込むためにこの交響曲の完成した3楽章までを音楽アカデミーに提出したところ、延長許可が下りることがなく（これは完成された作品を出すという規定を知らなかったというアルヴェーン自身の事務的ミスのようなのですが）、このことがアルヴェーンの反発心に火をつけたようで、スウェーデン要素のない曲想の違った終楽章を生み出すに到った、というエピソードがあります。もしそのまますんなりと奨学金の延長が認められていたならば、どのような終楽章になっていたでしょうかと興味は湧きあがりますが、今の終楽章が生まれてなかったとすると、それはそれで微妙な気持ちになりますね。スウェーデンの香りのする第1から第3楽章とスウェーデンの香りのない力作終楽章という面白いコントラストを是非聞いて貰いたいと思います。ちなみに作曲者自身によるピアノ4手版も楽譜があるので、こちらも実演機会があればと思っています。

交響曲第3番ホ長調作品23

(1905年作曲、1906年初演)

この曲はアルヴェーンがイタリアで夏休みを過ごした時に作曲されたものです。イタリアの陽光の影響か、非常に明るく快活な音楽に仕上がっています。第1楽章は冒頭シューマンの第3交響曲「ライン」を連想させるものの、シューマンよりは爽やかで、北欧の夏のようなサウンドに満ちた生き生きした音楽が流れます。第2楽章は美しいメロディをたっぴりと歌い込むような緩徐楽章で、ちょっと暑苦しく感じるところがあるのは、地中海性気候で夏の乾燥したイタリアの太陽のエネルギーにやられたせいかもしれませんね。第3楽章は典型的なスケルツォ楽章で速い三拍子にいろいろな楽器が速いパッセージで戯れている音楽で、大変絶妙なバランス感覚で書かれています。第4楽章は華やかな金管と弦楽器の速いパッセージが印象的な楽曲で、底抜けに明るい音楽が繰り広げられます。イタリアに想いを寄せた作曲家は概して明るい情熱的な曲（少々哀愁じみる場合もあるが）

を書くことが多いものですが、アルヴェーンの交響曲第3番もその好例かと思います。交響曲第2番を聴く前に、先に演奏時間が短めな交響曲第3番を聴いてみてはいかがでしょうか？まずは3番、そして2番と、ぜひとも両方を聴いてみてください。その後1番、5番、4番の順に楽しんでいただくのがおすすめです。4番、5番という後半の交響曲は3番までとは作風がかなり変わっていて、20世紀の近現代の音楽の要素もかなり取り入れているので、好みが分かれるかもしれませんが、アルヴェーンという作曲家の人となりを感じられ、面白いかと思います。

バレエ音楽「山の王」作品37

(1915-17年作曲、1923年初演)

バレエパントマイム「山の王」とも呼ばれますが、スウェーデン民話に基づくバレエで、全曲で80分近くになります。アルヴェーンはこの曲に相当エネルギーを注ぎ込んだらしく、私が一度アルヴェーンの自宅（現在ミュージアムになっている）に訪れた際に彼の仕事部屋の譜面台にこの山の王のスコアが展示されていたのを見たのですが、実に大仕事だなと思いました。私も出版されたスコアを持っていますが、ものすごいボリュームのスコアとなっています。80分という長さはもちろんのこと、編成が大きいのでスコアの段数が多いのと細かい動きのパートが多いこともあり、相当のページ数になってしまっています。バレエ音楽全曲だと情景部分やつなぎの部分が多いので、初めての方にはまずは美味しいところを纏めた17分くらいの組曲版をオススメしたいと思います。これは彼自身が好きな曲からなっており、中身は「神への祈り」、「トルルの娘の踊り」、「夏の雨」、「羊飼いの娘の踊り」の計4曲となっています。特に羊飼いの娘の踊りは、最近NHKの番組でバーヴォ・ヤルヴィの指揮によるNHK交響楽団の演奏を聴いたのですが、アンコールピースとしてもちょうど良い長さで楽しい曲なのでおすすめです。

バレエ音楽「放蕩息子」

(1957年作曲、同年初演)

アルヴェーンの残したもうひとつのバレエ音楽が「放蕩息子」です。この曲は彼の85歳の誕生日を祝って初演されています。スウェーデンの伝統音楽の中心であるダーラナに拠点を移した後、アルヴェーンはスウェーデンの伝統音楽を数多く取り込んだ作品を残していますが、このバレエ音楽「放蕩息子」はダーラナ地方の舞曲、とりわけポルスカを多数取り入れています。全部で7曲から構成され、演奏時間20分強とお手軽な長さということもあり大変聞きやすく、耳にも残りやすい作品なので、とりあえず聴いてみてはいかがでしょうか？1曲目の出だしは、まるでウェーバーの歌劇「魔弾の射手」の「狩人の合唱」の冒頭のように一瞬聴こえますが、森の情景を描き出しているような意味ではぴったりなのかもしれませんね。ただこの音楽はオペラではないので、その後ダーラナ地方のダンス音楽が続いていきます。私はこの曲を

実演したことが何度かありますが、どの曲もユニークで楽しい曲ばかりで、何度演奏しても厭きない名曲揃いです。演奏する場合は、個別に1曲だけ取り上げても、アンコールピースなどとして演奏しても良いでしょう。ただ、個人的な感想として、伝統音楽独特のニュアンスを装飾音で記譜しているのですが、本当はどうやってこのニュアンスを取り入れたら良いかが難しく、これは楽譜を読むより、原曲から答えを導くようなアプローチが良いのではと考えていまして、現在取組中です。アルヴェーン作品の中で伝統音楽要素が強い曲の場合は、スウェーデンの伝統音楽のことについてもよく知ることが大事だと思っていますので、伝統音楽との関連性についても研究していきたいと考えています。

劇付随音楽

「グスタフ2世アドルフ」作品49

(1932年初演)

1632年に30年戦争の戦場で亡くなったスウェーデン王グスタフ2世アドルフの没後300周年を記念してストックホルム・ロイヤル・オペラの舞台のためにアルヴェーンが委嘱された作品です。情景、間奏曲、皇帝フェルディナントの間、サラバンド、ブーレ、メヌエット、エレジー、戦場の全8曲から構成されていますが、エレジーがとりわけ有名で、スウェーデン王室の葬送の音楽としても使われています。2018年に開催したダーラナシンフォニエッタとのレクチャーコンサートの中でも、室内楽編曲版でお披露目されたことが懐かしく思い出されます。

大オーケストラのための祝典音楽 作品25

(1907年作曲、1908年初演)

今年2022年はアルヴェーンの生誕150周年記念の年です。アルヴェーンは作品26でプラスバンドのための祝典序曲、作品52でオーケストラのための祝典序曲を作曲しています。しかしイチ押しはこの作品25ですね。この祝典音楽は時々ノーベル賞授賞式でも演奏されることがあるようで、実に華麗なポロネーズ調の音楽で、一度聞いたらクセになりそうなくらいに分かりやすく、アルヴェーンの生誕150周年を祝うのに最もふさわしい音楽ではないでしょうか。みなさんこの曲で、記念すべきアルヴェーンイヤーをお祝いしましょう！

その他のおすすめ作曲家と作品

前編と後編の2回を通して今が旬のステーンハンマルとアルヴェーンの紹介をしてきましたが、最後に少しだけオススメの作曲家2名を簡単に紹介したいと思います。

ラーシュ・エリック・ラーションについて

ラーシュ・エリック・ラーション(1908年～1986年)はスウェーデン近現代音楽を代表する作曲家の一人で、指揮者としても活躍していました。スウェーデン放送局

の指揮者であったこともあり、作品のジャンルは多岐にわたり、映画音楽の作曲などもしていました。この作曲家も大好きなのでオススメの曲は山ほどあるのですが、今回はその中から3曲選りすぐって紹介したいと思います。

田園組曲作品19

ラーションの作風は、楽譜の印象からすると、ステーンハンマルが後半生に北歐的な方向性に転換した後の流れや、シベリウス風の流れを汲んでいるように思われます。日本においてはまだまだその名を知られていないこともあり、演奏されるとしても3曲ある交響曲よりは、組曲の方が短いこともあり取り掛かりも良く好まれるのではないのでしょうか。組曲は序曲、ロマンス、スケルツォの3つの楽曲から構成されています。どれも魅力的で個性的な曲ですが、弦楽器だけで歌い上げられるロマンスは特に絶品です。ラーションの作品はロマンスのように甘美な楽曲であっても、同時にとても健全で透明感があります。熱いけども爽やかとでも表現できるのでしょうか。序曲、スケルツォも北歐の叙情溢れた洗練された作品で完成度の高さは驚愕に値します。

組曲「冬物語」作品18

題材はシェークスピアの「冬物語」で舞台はイタリアのシチリア島なのですが、どうしてもスウェーデンの冬の景色が目の前に広がってしまうような曲です。先の田園組曲も風景が脳裏に浮かびますが、映画音楽を多く手がけた作曲家であるだけに、音による風景描写がとても巧みです。楽曲は、シチリアーナ、間奏曲、パストラール、エピローグの4曲から構成されていて、どれも分かりやすく、はじめて聞く人にもスッと入ってくる名曲です。

叙情組曲「偽りの神」 (カンタータ) 作品24

ソプラノとバリトンと語りと四声の混声合唱とオーケストラのための叙情組曲で、歌詞や語りのテキストはヤルマル・グルベリーによるものです。内容は反戦の詩で、第2次世界大戦中のスウェーデンの非同盟中立の立場が綴られています。特にオーケストラだけで演奏される1曲目の前奏曲が感動的な曲で、友人のスウェーデン人音楽家などはこの曲を聴くと目頭が熱くなるそうで、スウェーデン人にとって大切な曲だそうです。バリトンやソプラノソロ主体の曲や合唱主体の曲など楽曲としては6曲から構成されていますが、詩としては9つの部分に分かれています。スウェーデン国内においてはかなり有名な曲であるそうです。

ペッテション=ベリエルについて

もう一人ヴィルヘルム・ペッテション=ベリエル

(1868年～1942年)を紹介しましょう。作曲家としての活動もしていましたが、毒舌な音楽評論家として恐れられていた人でもあります。その中から代表作を2曲紹介します。

ピアノ曲集「フレーセーの花々」全3集

ペッテション＝ベリエルが後に永住の地としたイェムトランドのストーシェン湖に浮かぶフレーセー島の名前を冠したピアノ曲集で、全3集計21曲から成り立っています。フレーセー島周辺でのインスピレーションによって生み出された美しい小品の数々は、難易度が手頃なため広くスウェーデンのいろいろな方に演奏されているようです。また、親しみやすい旋律と比較的シンプルな作りから、室内楽やオーケストラ編成の編曲版もいろいろあるようで、広く愛されているようです。ペッテション＝ベリエルの生誕150周年であった2018年には、福岡県にて、江端玲子さんと吉田真仰さんの二人で全曲演奏のコンサートを開催したことがまだ記憶に新しいです。

交響曲第3番「サーミ」

ペッテション＝ベリエルは全部で交響曲を5曲書いていますが、その中でもこの交響曲第3番が最も有名です。第2楽章に北方先住民族であるサーミの民族音楽であるヨイクのメロディも使われており、とてもユニークな曲です。またオーケストラの楽器編成にピアノが入っていて、独特の響きが味わえるのも興味深いところでしょうか。



おわりに

前回、今回と2回に渡ってスウェーデンの今が旬のクラシック作曲家として、ステーンハンマルとアルヴェーンを中心に紹介させていただきました。紹介したいものは山ほどあるのですが、特にオススメのものに絞らせて頂きました。偶然ですが有名なスウェーデンの作曲家が1年違いで生誕記念イヤーを迎えるという贅沢な年回りになっていて、一気にご紹介しましたが、記念イヤーだけでなく、むしろ記念イヤーをきっかけにして、スウェーデンのクラシック作曲家の音楽の世界に足を踏み入れていただくと嬉しく思います。50年後の生誕200年の時には、また若い世代の人がスウェーデンの音楽を紹介する記事を書いていたら面白いなあと思います。またクラシック音楽だけでなく、昔から現地に伝わる伝統音楽の世界にも足を踏み入れてみるとますます面白くなりますよ。では、今回はこれにて筆を納めさせていただきます。

ご寄稿者紹介… 朝倉 崇(あさくら たかし)さん

北欧音楽研究を主軸に、その魅力を伝える活動をライフワークとする。指揮活動やレクチャーコンサート等を積極的に行う。スウェーデンを中心に北欧諸国を訪れ、音楽や文化、風土について度々取材したことで、日本での北欧音楽の啓蒙には、クラシック音楽と伝統音楽を両輪に進める必要があると考えている。これまでスウェーデンのダーラナシンフォニエッタとのレクチャーコンサート講師、風と緑の楽都音楽祭でのノルウェーの民族楽器の魅力伝える企画のプロデュース及び講師をはじめ、日本各地でクラシックや伝統音楽の演奏家と協働して北欧音楽の啓蒙活動を行ってきている。金沢市在住。



～ SCF 図書コーナー～

「私はカーリ、64歳で生まれた - Nowhere's Child」

カーリ・ロースヴァル
ナオミ・リネハン 著 速水 望 訳

出版社：海象社
価格：2,100円＋税
四六版 / 320ページ

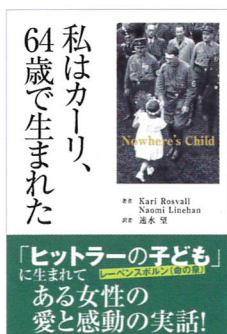
戦争の恐怖、憎しみや深い愛情、希望についての物語『私はカーリ、64歳で生まれた Nowhere's Child』。本書の主人公でもあり、著者でもあるカーリはスウェーデン南部で農場を営む夫婦に養女として育てられる。生みの親を探そうとすることから、ナチスの「レーベンスボルン(生命の泉)」計画で生まれたことを知らされる。ロシアのウクライナ侵攻により世界情勢が混沌としている今、戦争が引き起こす悲劇について、この本を読んで考えていただきたい。

「フランソンのさむい冬の日」

セシリア・ヘイッキラ 作 菱木 晃子 訳

出版社：化学同人
価格：1,600円＋税
216ミリ×216ミリ / 34ページ

フランソンはダンボールの家で暮らすねこ。クリスマスが近づく冬のある日、フランソンはたった一着の赤いセーターを着て町にでかけます。すると大変！いつのまにか大切なセーターがほどけて長い毛糸に。寒い冬にこれはいらい。毛糸をたどっていった先で待っていたのは…？スウェーデンから届いた、心あたたまる物語です。



新型コロナウイルスが初めて世界で確認され、世界各地で新たな生活様式を求められるようになって3回目の春になりました。欧米では3回目のワクチン接種を契機に、各種の制限を撤廃し、コロナ前の生活に戻つつある国も出てきていますが、日本では依然としてコロナの感染拡大防止対策が様々な場面で求められています。

そんな中でもスウェーデンをはじめとして海外との交流を積極的におこない、150号152号でその取り組みをご寄稿いただいたURL代表の浦野氏と北欧日本人学生会代表の中村氏に、今年度のお取り組みについてご寄稿いただきました。

寄稿

コロナ禍のオンライン イベントや子育てから考えた ジェンダー観のアップデート

URL (ユニバーサルリサーチラボ) 代表

浦野 真理

北欧日本人学生会代表 / URL YOUTH パートナー

中村 満里奈

はじめに

ちょうど1年前の150号と、10月の152号に本誌に寄稿させていただきました。2人目の子どもが誕生したばかりで、すやすや眠る赤ん坊の近くで文章を書いたのをよく覚えています。

それからの1年間は、なかなか収まらぬコロナ禍をどうにかやり過ごした1年でもあり、そんな中で赤ちゃんを丁寧に育てた1年間でもありました。自由に行動できない特別な時期に育児をしているのだと感じます。

人と人、国と国との距離を 変えつつあるコロナ禍

新型コロナウイルス (COVID-19) が流行して丸2年が経ちます。日本とスウェーデンの関係も、人の移動が極端に減り、それ以前と大きく様変わりしているのではないのでしょうか？

他方で、オンラインでのコミュニケーションが定着しました。人と人とのコミュニケーションが、地理的に近いかどうかに関わらなくなり、国内外を問わず繋がるようになったのです。とはいえ自由に日本から出られず、他の国が遠い存在になった感じがしています。この状況が終わるのを、今はただ心待ちにするばかりです。

日本で始めた 「民主シーフェスティバル」

スウェーデンにルーツをもつ民主シーフェスティバルを、日本でも立ち上げたい。そして根付かせたい。デンマーク人の友人クロマン・ソーレンさんとその母、藤田さなえさんからそのようなお話を聞きました。新型

コロナの影響でオンラインでの開催としましたが、日本全国各地の人たちが繋がるという意味で功を奏したように思います。「日本の民主シーフェスティバルは、日本全体をオンラインで繋げる形で始まった」、後々そのように振り返られるのだと思います。

知人のつながりを活かし、仲間たちと協力して2020年、2021年と続けて開催。いずれも開催期間は金、土、日の3日間でした。事前にボランティアを募り、WEBサイト制作、当日の運営スタッフ、SNS発信など、皆で協力して作り上げました。前年の一般参加者が運営スタッフに加わったり、前年の運営スタッフが今回はプログラムを出展する側になったり、という流れができたのは嬉しい現象で、今後も必ず続いていくだろうと確信できるようになりました。(ちなみに私たちは縮めて「デモフェス」と呼んでいます)。スウェーデン大使館をはじめ、フィンランド、デンマーク、ノルウェー、アイスランドの各大使館に後援していただきました。

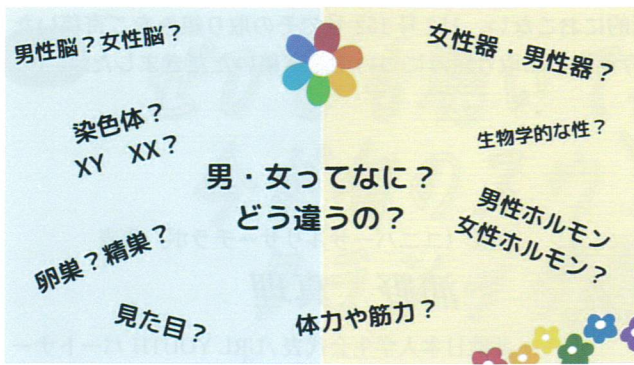
民主シー
フェスティバル
ジャパン 2021
公式サイト



<https://democracyfestivaljapan.jp/>

私と中村満里奈さんのコンビで、デモフェスの2日目に90分のプログラムを開催しました。タイトルは「ジェンダー先進国スウェーデンの暮らしを覗いてみた！どんな社会にしたいか、一緒に考えてみませんか？」です。満里奈さんがスウェーデンに留学をし、その後もスウェーデンを訪れて生活をした中で感じたこと、見えてきたこと、そして今描いている「理想の社会とは何か？」を率直に参加者に伝えてくれました。

男と女って、そもそも何？

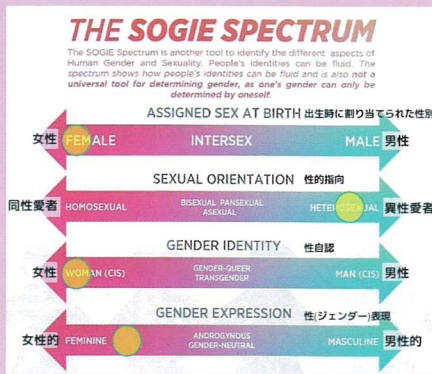


まず、私たちを「男」と「女」の2つにわけることが本当に正しいのか？という問題提起をします。染色体やホルモン、身体的特徴などを説明し、現実には性は2つでなく多様なのだと伝えました。

自分のSOGIEを考えてみる

多くの方は自分の SOGIE (Sexual Orientation 性的指向、Gender Identity 性自認、Gender Expression 性表現) について日頃あまり考えないのではないのでしょうか。参加者皆で自分の SOGIE をチェックしてみました。人を男性と女性の2つにわけるとは、そうでない人たち (性的マイノリティ) の存在を排除してしまいます。また「男らしさ」「女らしさ」といったステレオタイプも、一人ひとり違うはずの多様な個性を定型的に分けてしまいます。

①自分のSOGIEを考えてみよう



黄色い丸が満里奈さんの現在地。グラデーションの中で好きな場所に自分を置けます。AかBかの二者択一で考えないのがポイントです。

「個人が個人として認められる社会」とは、一人ひとりの違いを認めて尊重し合う社会のこと。意見の違いも、外見の違いも、他人に強要してはならない。その象徴が口から発する言葉です。

自分の特権と発言の配慮

スウェーデンの人たちとのコミュニケーションの中で満里奈さんが学んだのは「公の場で言うてはいけないことととても配慮していること」だったそうです。大切なのは、自分が特権をもっているかどうかの認識です。

②特権を理解し、発言に気を配ろう

パブリックな場とプライベートな場では言動の影響が異なる

【図1】 あなたはマジョリティ性とマイノリティ性では、どちらが多いですか？

アイデンティティ	マジョリティ性	マイノリティ性
人種・民族	<input checked="" type="checkbox"/> 日本人	<input type="checkbox"/> 人種・民族的マイノリティ (例: 在日コリアン、アイタ民族等)
学歴	<input checked="" type="checkbox"/> 高学歴	<input type="checkbox"/> 低学歴
身体・精神	<input checked="" type="checkbox"/> 健康者	<input type="checkbox"/> 障がい者
出生時に割り当てられた性別	<input type="checkbox"/> 男性	<input checked="" type="checkbox"/> 女性
性的指向	<input checked="" type="checkbox"/> 異性愛者	<input type="checkbox"/> 同性愛者・バイセクシャル・パンセクシャル等
性・ジェンダー自認	<input checked="" type="checkbox"/> シスジェンダー (身体と性自認が一致している人)	<input type="checkbox"/> トランスジェンダー・Xジェンダー等
所得	<input checked="" type="checkbox"/> 高所得	<input type="checkbox"/> 低所得
居住地域	<input checked="" type="checkbox"/> 大都市圏在住	<input type="checkbox"/> 地方在住

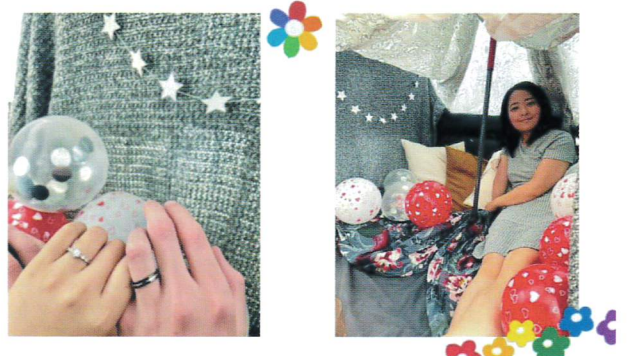
▲自分がどちらにあてはまるか「」を記入してみましょう。マジョリティ性が多ければ、より特権を有している例に属しています。すべてがマジョリティ性の人には、社会の中でかなり特権を有していることになります。

様々な項目について、自分がマジョリティかマイノリティかをチェックしていきます。こちらも満里奈さんのケース。日本にいればマジョリティですが、スウェーデンではマイノリティ。つまり居場所が変われば逆にもなるのです。

参加者の方々の反応もよく、皆が自分らしく生きるためには何が大切かを学ぶ良い機会になりました。

プロポーズは男がするもの？

実は満里奈さん、少し前にスウェーデン人のパートナーと婚約をしたそうで、それをさらりと参加者の皆さんに紹介しました。印象的なのはプロポーズのエピソード。以前から「スウェーデンにいと自分が女性であることを忘れてしまう」と口にする満里奈さんは、プロポーズは自分がするつもりでいたそうで、パートナーからプロポーズをされてめでたく婚約成立したあと、今度は自分からプロポーズをしたのだそうです。



おめでとうございます！早く一緒に暮らしたいですね。

【イベント報告・ジェンダー先進国スウェーデンの暮らしを覗いてみよう！】

中村満里奈

昨年、デモクラシーフェスティバルと、法政大学と関西大学の共催で開催された KANDAI×HOSEI SDGs WEEKs 2021 に登壇しました。今回はリアルタイムで匿名のコメントを書き込めるツールを使用したセミナー形式で 70 名近くの方にお申込みいただいた、SDGs WEEKs のイベント報告をさせていただきます。

私はここ 2 年程、大学院での研究以外にオンラインでヨーロッパの包括的な性教育を学びつつ、スウェーデンと日本を往来して行きました。その中で、ジェンダー不

平等の解決には、社会や政治の仕組みを変えていくだけでなく、同時にだれもが日常的に取り組むべきことが多くあることに気付いたのです。このイベントでは、「そもそも男女とは何か、どう違うのかを考える」→「私が目指している社会を共有する」→「個人で今からできることを伝える」→「匿名の質問や感想に答える」→「ジェンダー平等が進んだスウェーデン社会の様子を写真と共に伝える」というステップを踏みました。フェミニストが目指すジェンダー平等な社会像を、参加者の皆さんに具体的にイメージしてもらうことで目標を共有し、このイベントを日頃の行動に変化を起こすきっかけにしてもらうことを目的としました。

イベントでは、参加者の皆さんと一緒に自分を見つめ直すきっかけをいくつか提案しています。例えば自分のSOGIEやマジョリティ性を、私の例を紹介しながら頭の中で考えてもらいました。マイノリティに対する差別の話をする際、「普通の人（自分）も普通でない特別な人（例えばLGBTQIA+当事者）を理解してあげよう」という文脈で語られることがありますが、セクシュアリティは白黒がはっきりしないグラデーションであり、そのどこに自分が位置するかを決める権利は自分だけが持つことを伝えたいと思ったからです。ジェンダーの問題に目を向けると、女性であるだけでとてつもないマイノリティ性を持つように思えてしまいます。しかし、例えば私の場合は「健康でシスジェンダー（出生時に割り当てられた性別と性自認が一致する）の異性愛者である」というマジョリティ性を持つため、障害を持つ女性、トランス女性、他の性的指向を持つ女性たちと比べるととてつもない特権を持っているのです。

このようにより多くの人が自分のSOGIEや特権性を知ることによって、「普通」というものは存在せず、性別やジェンダーに関わらず人々は既にとても多様であることに気付くことができます。また、自分が特権を持つものを認識することで、そのトピックについてマイノリティの声を聞いて学ぶ責任があることに気づくことができると思います。同世代のスウェーデン人の友人達と話していて、「僕はゲイとしていじめを受けたり理解されなかったりしたこともあったけど、同時に男性であるという特権もあるからジェンダーについてもっと知りたい」と言われたときに、とても感動したのを覚えています。

イベントの後半では、スウェーデンの様子を写真と共に紹介しました。特に反響が大きかったのは、イベント前日にスウェーデンで初の女性首相が選ばれ、これで北欧5ヶ国全ての国で女性首相を経験したという話です。スウェーデン政府の党首の写真も紹介し、フェミニスト党があることや党首の女性の多さ、そして何より政治家の若さにも驚いた方が多くいました。また、スウェーデンでメジャーとなりつつあるジェンダーを分けない個室トイレも紹介しました。現地でトイレの写真を撮るのは難しかったのでなかなか意図が伝わらず、熱心な参加者の方々にイベント後たくさんご質問をいただいたトピックでもあります。スウェーデンの大学やショッピングモール・公園などで多いのは、手洗い場やサニタリーボックス

スが個室にあるトイレをいくつも道に面して並べたもの。ジェンダーに関わらずどの個室も使うことができ、トランスジェンダーへの配慮と共に、個人的にはトイレでの性暴力も減ると考えています。イベントでは匿名で随時コメントを書き込めるソフトを使用しましたが、面白いと思ったのは「スウェーデンでは性別の区別をしないことで困ることはないですか？」「男女の概念は必要だと思いますか（必要じゃないんですか？）」という質問をイベント中も後もいただいたことです。イベント中にも説明した通り、出生時に割り当てられる性別とはあくまで外性器の見た目のみで判断されるものであるため、どちらの（または中間の）外性器を持とうと、それだけを元に区別される必要はないと思います。男女の区別が色濃く残る日本では、この区別をなくして本当に大丈夫なのか？という不安があることが感じられました。ちなみにスウェーデンでは、スポーツの授業も、（自前の）水着での水泳の授業も、生理について習う際も男女を分けられないのが一般的だそうです。

最後に、イベントで一番伝えたかったことの一つは「何か発言する前に一瞬考える訓練をしよう」ということでした。スウェーデンで私が驚かされ、同時にジェンダーの呪いから救われたのがこの文化でもあります。外見（特に顔や体型、肌の色）については基本的に言及しないという前提をほとんどの人が持っており、「あの人美人だね、イケメンだね」「太った？痩せた？」という発言をしている人は見たことがありません。日本ではこれらを日常的に見聞きするので、私自身も何度か「あの人すごく美人だね」と発言し、その度にスウェーデン人の友人達にさりげなく止められました。自分の外見を卑下する人もほとんどおらず、他人の外見も自分の外見も言葉にしなくなり、次第に外見が気にならなくなったのです。どんな体型や人種、ジェンダーの人を見ても、その人が太っているのか、どこの国出身なのか、男性か女性かを考えず、一人の人として見るようになってきた自分にたまに気付きます。

今は私も日々発言に気をつけていて、発言する前に一度「これを口に出して伝えることで、話し相手や周りにいる人を傷つけないか」を一瞬考えるようにしています。慣れるまではかなり意識的に取り組む必要があるので訓練が必要ですが、慣れると他人の外見が気にならなくなると思います。こういった一人一人の小さな日々の努力が、ジェンダーだけでなく様々な差別の解消の第一歩になると信じています。

【女子力について】

日本には「女医」「女子アナ」「女性社長」など、わざわざ女性であることを表す言葉が多々ありますが、中でも気になるのが「女子力」という言葉。調べてみると「女子力」は2009年の流行語大賞にノミネートされ、次第に一般的に定着していったようです。

現在では、私立の女子中高や女子大・短大には、女子力の向上に取り組んでいることを掲げ「女子力アップ講座」をアピールしている学校が多くあるようです。その中身は、

着物の着付け、就活メイク、話し方講座、など様々。これらが学校で教わるべきもの、社会の一員として、いや「女性として」身につけるべきものだと一般に思われているならば、違和感を持たずにいられません。皆さんはいかがでしょう？

育児をとらえ直す

現在5歳になる一人目の育児は、何もかもが初めてでした。思い返せば、それは生まれる前からでした。当時住んでいた世田谷区は日本一待機児童の多い自治体でしたので、産んだ後のライフスタイルについても悩みと不安、検討事項が実に多かったのを覚えています。

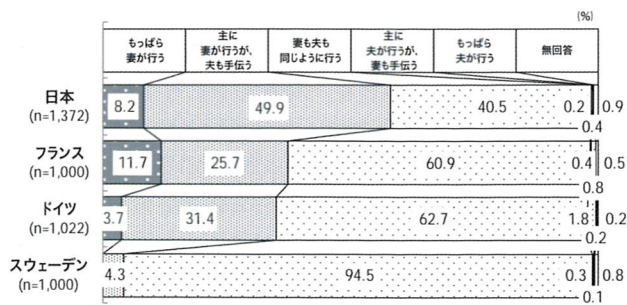
日本で男性が育児をすること

私は、自分の価値観に従って育休（育児休業）を取得することに決めました。結構勇気が要りました。私の勤めていた会社では創業以来初の「男性社員の育休」でした。痛感したのは、日本ではとても珍しいことだ、という事実です（その年の男性育休取得率は3.16%でした）。

産まれた赤ちゃんとの毎日は、本当に特別でした。元々は、妻ひとりで育児をするのがいかに大変かを案じたのが最大の目的でした。しかし実際には、まったく違う予想外の経験を得ました。その日々は、人生で2度と味わえないものでした。

子どもといつも一緒にいる。一緒にいればいるほど、愛情が湧いてくる。愛情が湧けば湧くほど、もっと一緒に時間を過ごしたくなる…完全に仕事から離れていない限り、この感覚は想像することすらできません。勇気を出して育休をとってよかった、本当にそう思います。だからこそ、慣習として日本にはまだ根付いていない「男性の育児」については、ダイナミックに変わってほしい、変えていかなければならないと強く思います。

小学校入学前の子供の育児における夫・妻の役割について



【出典】内閣府「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf_index.html

コロナ禍の仕事と育児は、相性がすこぶる悪い

二人目は、コロナ禍で生まれました。立会い出産禁止のため、病院スタッフが分娩台の脇からスマホで中継してくれる、いわば「リモート立会い出産」をしました。



画面越しでも、一人の人間がこの世に産まれる瞬間の感動は、変わらないものです。

【無痛分娩のこと】

一人目の子は里帰り出産で、妻の実家に近い仙台の病院でした。当時東京都内の会社に勤務していた私は、真夜中に陣痛の知らせを聞き、新幹線を使って仙台まで駆けつけ、望み通り立ち会うことができました。痛みを我慢するしかない妻、隣で寄り添うしかない私。産声を聴くまで10時間以上かかりました。

虫歯治療でも使うような、麻酔や鎮痛剤をなぜ使わないのか？病院なのだから必ず置いてあるに違いない！なぜこの激痛を放っておくのか！そんなことを頭の中でぐるぐると考えていました。

後で調べてみると「無痛分娩」は、国によってさまざまであることがわかりました。日本産科麻酔学会によると、各国の無痛分娩で出産する比率[*]は、

- フィンランド・・・89%
- アメリカ・・・73%
- スウェーデン・・・66%
- イギリス・・・60%
- 日本・・・6%

分娩の激痛（私には想像できませんが）を目の当たりにしたからには「文化が違うんだね」で終わらせる訳にはいきません。「ぜひ見直してほしい」そう願わずにはいられません。

【出典】※硬膜外無痛分娩率（2016年）
 【出典】日本産科麻酔学会ホームページ
<https://www.jssoap.com/general/painless/q19>

コロナ禍の育児については、私は今とても悩ましい経験をしているところです。感染の懸念はもちろん、日々小さな困難に直面します。独立して会社員でなくなり、また世の中全体がリモートワークにシフトしているので、図らずも「自宅が仕事場でもあり子育ての場でもある」という状況になってしまいました。毎日が迷いと葛藤の連続です。

わが子を愛すれば愛するほど、一緒にいたいと思うものです。しかし会社員が育休をとるとの違い、独立後の今の私には仕事関係の連絡が無慈悲に入ってきます。メールだけでなく、slack、messenger、その他の連絡ツールが世の中のリモート化により活用されるようになりました。その手の通知は、育児とはまるで違うリズムで飛んでくるのです。仕事の連絡と、目の前の愛する赤ちゃんの世話のどちらを優先するのか、私にとって極めて明確です。しかし仕事相手にしてみたら一切関係ありません。大変頭の痛い問題です。他にも「よし、パソコン作業に集中するぞ」と心に決めて仕事モードに入った矢先に、「おー

と一さーん！」と上の子の甘えた声が聞こえてくるのも日常茶飯事。また隣の部屋で下の子がお昼寝をしている最中など、キーボードを叩く音すら「起こしてしまわないか？」と躊躇する心境です。

こういった葛藤は決して小さくなく、その期間も長く大変な思いをしています。総じてこの2年余りはとても幸せです。喋るのが大好きな5歳の子と、純粹無垢で愛くるしい1歳の子、そして何より人生を共に歩んでいる最大の理解者の妻。四人で毎日ずっと一緒に暮らすのはとても楽しいもので、起きている時間の大半、私の顔は微笑んでいるのです。

コロナ禍が時間の大切さを教えてくれた

コロナ禍は、私に大切なことを教えてくれました。それは人生における、時間の大切さです。

本当の意味でこれを認識するまで、私はとても忙しく、ともすると時間を粗末に使っていたように思います。気持ちにはせわしなく、時間の使い方に余裕をもたせることもなく過ごしていました。きっと、私だけではないはず。これまで、私たちはあまりにも多くのことを同時並行しすぎていたのかもしれませんが。今は、一日一日、過ごす時間をじっくり味わい、子どもたちの変化を丁寧に見つめながら暮らすようになりました。

先の読めない時代にこそ

世界的なパンデミックが続いています。国際情勢も、半年前にすら想像できないような混乱が起きています。時代の変化の真っ只中にいることを、ますます強く感じるようになってきました。

まさに先の読めない時代です。だからこそ、毎日を大切に。近くの人との時間を大切にする。そんなことを、2022年の今、改めて心に刻んでいます。

【ネガティブ・ケイパビリティ】

最近興味深い言葉に出会いました。ネガティブ・ケイパビリティという言葉です。19世紀イギリスの詩人ジョン・キーツが見出して名付けたこの言葉は「不確実なものや未解決のものを受容する能力」と説明されます。難しい言葉です。詩人キーツから約160年の時を経て精神科医ビオンによって再び陽の光が当たりました。

不可思議さや疑問を持ち続けられること。すぐに答えが欲しい、マニュアルが欲しい、とならない心の習慣のことです。情報化社会では削られやすい態度かもしれません。

精神科医であり、小説家でもある糸木蓬生さんが書いた『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』（2017年）には、先の読めない時代を生きるためのヒントが瑞々しく書かれています。今の私のバイブルになっています。

これまでの自分のキャリアを振り返ると、大学の研究室で物質を研究し、民間企業では人工知能という最先端のテクノロジーとビジネスの領域で研究職を勤めました。家族をもち、仕事も独立して、今は研究領域をより実社会に近づけています。キャリアを通して自分のテーマは変化してきましたが、一貫して私は「未来」に強く関心を持ち続けています。その根っこには、未来への懸念があります。希望よりも心配のほうが強いのです。地球環境、紛争や対立、格差や孤独の問題、エスカレートする資本主義とそれによる人間の心の喪失。日本のジェンダー差別や教育の抱える問題。数えたらきりがありません。こういった懸念をベースにしつつ、未来を決して無視しないのは、未来を良い方向に変えたいと思うからなのです。

私の頭の中にある「未来」とは何か。それは私自身の人生の未来でもあり、子どもたちの未来でもあります。そして、私たち皆が生きている社会の未来であり、動物や植物を含む地球全体の未来です。未来をつくることはコラボレーション＝協働作業です。URLという活動体の仲間たちとの活動を、またこの『ピョルク』に書く機会があればとても嬉しいです。満里奈さんは今年も6～8月にスウェーデンで過ごす予定だそうです。子どもを育てる父親の姿や、若者たちが将来について何を考えているのか。今の社会についてどんな問題意識を持っているのか。そういった現地の人たちの生の声を私たちに共有して欲しいとお願いしています。そして、スウェーデン交流センターとのコラボレーション＝協働を、今年ぜひ叶えたいと思っています。

ご寄稿者紹介

うらの まこと

浦野 真理 さん



1978年埼玉県生まれ、つくば市在住。夏のストックホルム、コペンハーゲンへの旅行をきっかけに、北欧に関心をもつように。現在2人の子育てに奮闘中（5歳と1歳）。工学系研究職として企業に務める傍ら、個人活動でURL（Universal Research Laboratory）を2016年に立ち上げ、北欧の他に、テクノロジーや新しい経済、環境問題などの社会課題について広く探究している。

なかむら まりな

中村 満里奈 さん



都市計画を専攻した大学院を卒業。これまで5カ国に留学経験があり、最後に留学したスウェーデンから日本に帰国した時の衝撃から、ジェンダー学が目覚める。世界日本人学生会、北欧日本人学生会（代表）、URLの3つのコミュニティに属し、オンラインでのイベント企画運営をメインに多様な場づくりをしている。セムラが大好き。インスタグラム：@marina.anzu お気軽にフォローしてください！



気分は北欧生活。

スウェーデンヒルズ Since 1984
Sweden
Hills 

札幌郊外の丘に北欧の街並。 スウェーデンヒルズ。

大都市近郊でありながら自然に囲まれた美しい街並。
「人が入らしく、自然と調和して豊かに暮らす」を理想に、
スウェーデンの住環境を再現した住宅地として誕生以来30年。
美しい風景の中で約300家族の暮らしが息づいています。

0120-242-522

スウェーデンヒルズウエスト地区 レクサンド公園

賛助会員入会のお願い

一般財団法人スウェーデン交流センターは、ガラス作品や木工作品の制作などを通して多方面での交流を行うとともに、夏至祭、ルシア祭、各種展覧会など、年間を通して様々な催しを行い、スウェーデン文化の紹介を積極的に行なっています。

特に「世界一臭いスウェーデンの発酵にしん」スールストロミングの試食会を毎年開催し、多くの皆様からご好評を頂いております。

これらの催しは、当センターの趣旨にご賛同くださる皆様が賛助会員としてその運営基盤をささえてくださっており、毎回の催し等は、広報誌「ビョルク」にも掲載し、賛助会員の皆様には、年4回ご自宅まで郵送、いち早く情報提供しています。ぜひ賛助会員にご入会下さいませよう、お願いいたします。

賛助個人会員 年会費 ー□ 5,000円

賛助法人会員 年会費 ー□ 20,000円

あともがき

●昨年末から広がりを見せていた新型コロナウイルス感染拡大第6波も、漸くピークを過ぎて全国的に感染者数が減少に転じてきていますね。スウェーデンをはじめ欧州ではワクチン三回目の接種とともに、これまでの規制を解除しコロナ前と同じ生活に戻りつつあります。日本でも一日も早くマスクや様々な自粛のない日々が来ることを願うばかりですね。

●2月末から毎日の様に報道されている東ヨーロッパのウクライナでの出来事は、日本やスウェーデンだけでなく、世界各地で大きな関心を集めています。私たち一人ひとりに今何ができるか、そしてそれを声に出していくことの必要性が問われている気がします。